●2012年度岐阜経済大学地域経済研究所公開講演会報告

共にある包摂型社会の構築は可能なのか？
～若年者の薬物乱用問題と回復支援～

コーディネイター（兼パネラー）　梅　木　真寿郎*

はじめに
鼎談からの学び
総括にかえて
謝辞

はじめに

早いもので、東日本大震災から、もうじき丸２年が経過しようとしています。多くの人命を奪った国難ともいえる惨状は、「絆」という言葉の意味を、改めて問いかけることとなりました。人と人とのつながり、延いては、お互いを認めあい、受け容れあう「包摂型社会の必要性」が問われているのではないでしょうか。しかし、現実の社会の中では、それに反して様々な理由の下、排除されている人々がいるのも現実です。このことに対して、私たちは、一人の市民として、同じ地域で暮らす住民として、何ができるのでしょうか。このことについて、本学の学生をはじめ、地域の方々と共に、是非とも熟議をしたいというのが、今回の企画をするにあたっての意図であり、目的でありました。

では、なぜ“若年者の薬物問題”をテーマにしたのかということでありますが、記憶に新しいことと思いますが、脱法ハーブ等の問題として、若年者が安易に薬物に手を染める様が報じられました。もちろん、禁止薬物等の使用は、決して許されるべきものではありません。しかし、遺憾ではありますが、現に手を出してしまう若者も後を絶ちません。では、そのことに対して、社会はどう向き合っているのか。結局のところ、様々なステレオタイプの烙印を押し、また、自己責任論で簡単に片づけてしまい、社会的落後者として排除する社会が存在しているのではないでしょうか。残念ながら、それが現状なのではないでしょうか。この課題に対して、法による規制を前提とした“legal model”のみで対処することは、実際問題として、その解決には限界があり、だからこそ「回復支援の社会化」といった「福祉モデル」が必要不可欠であると考えます。このような問題意識のもと、議論しようと試みたものが、今回の公開講演会と鼎談であったわけです。

鼎談からの学び

鼎談においては、講演会に引き続いて引土絵未先生、そして岐阜ダルク代表の遠山香氏にご登壇いただき、それに梅木が加わるかたちで、議論を行いました。その概略としては、私たちが住む岐阜県における現状と課題、そして、それに対する具体的な取組みを踏まえ、では私たち一人ひとりには何ができるのかということを探っていくものでありました。遠山代表からは、自らの体験とそこからの回復のプロセス、そして「AJU岐阜ダルク・鵜鮎つうしん」での啓発活動や、女性ハウス設立に向けた取組みなどについて、語っていただきました。「不幸のどん底」とすら思える体験を、「神様が用意してくれたもの」と肯定的に受け容れるその様は、とても印象的なものであったとともに、感銘を覚えるものでありました。詩人の星野富弘氏が「わたしは傷を持っている。でもその傷のところから、あなたのやさしさがしみてくる。」と詠んで

＊　岐阜経済大学経済学部専任講師

いますが、引土先生、そして遠山代表の話は、そのような経験を通し育まれた深い人間性が存在し、その「経験による導き」こそが、聴くものを引きつけて止まない力となっているのだと実感させられました。

ソーシャルワーカーとして、わずかながら臨床経験をした身であった私にとって、引土先生の言葉には、思わず「ハッ」とさせられました。専門家は「上のほうから上がっておいで」と呼びかけるのに対して、当事者からの支えは「そこは寂しいだろう、一緒に上がっていこう」と声をかけるというのです。専門性の死角になりがちな、当事者性の特徴を簡潔に言い当てたものであり、支援専門職の養成をするにあたって、決して忘れてはならない胸に止めておくべきものでありました。

総括にかえて

武田徹氏は著書『殺して忘れる社会』の中で、次のように言っています。「私たちは『殺す社会』に暮らしている。この社会は、不祥事を起こした人や企業を、その社会的生命を抹殺するまで許さない」と。そして、そのことに輪をかけて、「忘れっぽい」社会であるというのです。要するに、私たち一人ひとりは、「すぐに（社会から）忘れられるほど他者の存在が軽くなって」いるのではないかということです。この武田氏の指摘は、的を射ているように思えます。マザーテレサが「愛」の対極に位置するものを、「無関心」であると説いたことは、現代社会に生きる私たち、一人ひとりに突き付けられた課題なのであろうと思います。今回の議論を一つのきっかけとして、薬物依存の問題について、「何が問題なのか？」を知るということ、このことが、今回のテーマであった「共にある包摂型社会の構築は可能なのか？」の問いに対しての応答の第一歩であろうと考えます。

そしてその上で、では、私たちが目指すべき「共にある包摂型社会とは何か」ということについてでありますが、引土先生の講演の「結び」の言葉に集約されるように思われます。施設としての福祉的拠点も確かに必要です、しかし、真の意味で問われるべき本質は、物質的な建造物や構造物ではないということです。共にある包摂型社会の構築を可能にするものは、私たち一人ひとりの心の中に、「他者を受け容れ、共に歩んでいこうとする砦を築いていくこと」このことこそが、問われているのではないでしょうか。障がいを個性として捉え、「ギフト」として考える福祉的発想からいうと、社会的排除につなげる様々なステレオタイプは、実はすべて個性であり「ギフト」であるのかもしれません。その個性を受け容れ合い、「ギフト」として感謝できる社会のあり様が、「共にある包摂型社会」を可能にしてくれるのかもしれません。いずれにせよ、今後の課題ということになりますが、共にある社会を今後とも考えていきたいものです。

謝辞

最後に、ご多忙の中、ご講演下さった引土先生と、遠山香代表に、この場を借りて改めて、感謝の意を表します。また、共に議論する場に集っていただいた地域の方々や学生諸君をはじめ、本会を支えていただいた教職員の方々に改めて御礼申し上げます。